

海の少年

小川未明

青空文庫

今年の夏休みことし なつやすみに、正雄まさおさんは、母かあさんや姉ねえさんに連れられて、江の島の別荘えしま べつそうへ避暑ひしよにまいりました。正雄まさおさんは海うみが珍しいので、毎まい日朝にちあさから晩ばんまで、海辺うみべへ出でては、美うつくしい貝かいがらや、小石こいしなどを拾ひろい集あつめて、それをたもとに入れて、重おもくなったのをかかえて家うちへ帰かえると、姉あねや妹いもに見みせて、だんだんたくさんにたまるのを見みて、東とう京きやうへのおみやげにしようと思よつこんでいました。

ある日ひのこと、正雄まさおさんは、ただ一人ひとりで海うみの方ほうから吹ふいてくる涼すずしい風かぜに吹ふかれながら波打なみうちぎわを、あちらこちらと小石こいしや貝かいがらを見みつけながら歩あるいて、

「見みつかれしよ、見みつかれしよ、己おれの目めに見みつかれしよ。真しん珠じゆの貝かいがら見みつかれしよ。」
 といいました。

青あお々あおとした海うみには白帆しらほの影かげが、白はく鳥ちやうの飛とんでいるように見みえて、それはそれはいいお天気てんきでありました。

そのとき、あちらの岩いわの上うえに空色そらいろの着物きものを着きた、自分じぶんと同じおない年としごろの十二さい、三歳さいの子供こどもが、立たっていて、こつちを見みて手招てまねぎをしていました。正雄まさおさんは、さっそくそのそばへ駆かけ寄よつて、

「だれだいたい君は、やはり江の島へきているのかい。僕といっしよに遊ぼうじゃないか。」
といいました。

空色の着物を着た子供はにっこり笑つて、

「僕も独りで、つまらないから、君といっしよに遊ぼうと思つて呼んだのさ。」

「じゃ、二人で仲よく遊ぼうよ。」と、正雄さんは、その岩の下に立つて見上げました。

「君、この岩の上へあがりたまえな。」

しかし、正雄さんにはあまり高くてのぼられないので、

「僕には上がれないよ。」と悲しそうにいいました。すると、

「そんなら僕が下りよう。」と、ひらひらと飛び下りて、さあ、いっしよに歌つて遊ぼう

よと、二人は学校でおそわつた唱歌などを声をそろえて歌つたのであります。そして

二人は、べにがにや、美しい貝がらや、白い小石などを拾つて、晩方までおもしろく遊

んでいました。いつしか夕暮れ方になりますと、正雄さんは、

「もう家へ帰ろう、お母さんが待つていなさるから。」と、家の方へ帰りかけますと、

「僕も、もう帰るよ。じゃ君、また明日いっしよに遊ぼう。さようなら。」といつて、空

色の着物を着た子供は例の高い岩の上へ、つるつるとはい上がりましたが、はやその姿

は見えませんでした。

「明くる日の昼ごろ、正雄さんは、海辺へ行ってみますと、いつのまにやら、昨日見た空色の着物を着た子供がきていました、

「や、失敬っ。」と声をかけて駆け寄り、

「君にこれをやろうと思つて拾つてきたよ。」と、それはそれはきれいな真珠や、さんごや、めのうなどをたくさんくれたのであります。正雄さんは喜んで、その日家へ帰つて、お母さんやお父さんに見せますと、ご両親さまは、たいそうびっくりなさつて、

「正雄や、だれからこんなけっこうなものをおもらいだ。え、その子供はどこの子供で、名はなんといひます。」と、きびしく問われたのであります。正雄さんは、

「どこの子供ですかぞんじません。」と、ただ泣いていました。お母さんは、

「正雄や、もうこれからけつして、こんなものをおもらいでないよ。そして、さつそく明日、この品物をその子供にお返しなさいよ。」と、かたくいいきかされたのであります。

「明くる日正雄さんは、また海辺へいきますと、もう自分より先にその子供がきています。昨日のよりさらに美しいさんごや、紫水晶や、めのうなどを持ってきて、あげようといつて、正雄さんの前にひろげたのであります。正雄さんは、昨日の晩、お父さん

や、お母さんにしかられたことを思い出して、

「君、僕は昨晚、これをもらっていったので、たいへんに、お父さんやお母さんにしかられてしまった。もう欲しくないから、昨日、もらったのを返すよ。」と返したのであります。

すると、空色の着物を着た子供は不審そうな顔つきをして、

「なんで、君のお父さんや、お母さんはしかつたんだい。」とききますと、正雄さんは、
「人から、こんなものをもらうでない、と、いつて……。」「と答えました。

すると、空色の着物を着た子供は、からからと笑って、

「陸の上の人間はみようだな……。」「といました。正雄さんは、不思議に思つて、

「え、君、陸の上つて、君は、いつたどこからきたんだい。」「

「僕は、海の中に住んでいる人間だよ。」「

「海の中にも国があるかい。」「と、正雄さんは、ますます不思議がつてきますと、

「君はばかだな、海の底にりつばな都会があるのを知らないのかえ、陸の上の家みたいに、
こんなに来たなくはないよ。水晶もめのうも拾い手がなほ落ちてるよ。」「

「そうかなあ。」「と、正雄さんは感心してしまいました。

「君は、今年何年生だい。」と、海の中の子供がききますから、正雄さんは、

「僕は高等三年だよ。」と答えました。

「僕は今年四年生だ。いちばん修身と歴史が好きだよ。君は？ ……」

正雄さんも歴史は大好きなものですから、

「僕も歴史は好きだ。やはり海の学校の読本にも、壇の浦の合戦のことが書いてあるかえ。」とききました。

「それはあるさ、義経の八そう飛びや、ネルソンの話など、先生からいつきいてもおもしろいや。」

「僕も、海の学校へいつてみたいな。」

「君、来年きたら連れていつてあげよう。もう明日から、僕のほうの学校が始まるから。君も晩に東京へ帰るんだろう。ほんとうに来年の夏休みには、また君もきたまえ。僕もきつとくるから、そして海の底の都には、こんな真珠や、紫水晶や、さんごや、めのうなどが、ごろごろころがっていて、建物なんか、みんなこれでできているから、電気燈がつくと、いつでも町じゆうがイルミネーションをしたようで、はじめてきたものは目がくらむかもしれないよ。」

「じゃ来年は、ぜひ連れていつてくれたまえ。」と正雄さんは、くれぐれもたのみました。

そのうちに日が暮れてきますと、西の海が真紅に夕焼けの雲を浸して、黄金色の波がちらちらと輝いたのであります。そのとき海の中に音楽が響いて、一個の大きなかめが波間に浮き出て、海の子供を迎えにきました。

「じゃ失敬！ お達者で、また来年あおう。さようなら。さようなら。」
といて、そのかめの背中に乗って、空色の着物を着た子供は、波の間に見えなくなつてしまいました。そしてまた波が、ど、ど、ど——ときて、砂の上に落ちていたさんごや、真珠や、紫水晶を洗い流していつてしまったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「少年文庫」

1906（明治39）年11月

※表題は底本では、「海《うみ》の少年《しょうねん》」となっています。

※初出時の表題は「海底の都」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海の少年

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>